

# 全海運所属組合の横顔

## 連載 第11回

# 中国地方海運組合連合会

## その2 山口県内航海運組合

### 【組合の概要】

事務局 〒745-0025 山口県周南市築港町 13-38  
 徳山下松港湾福祉センター内  
 電話 0834-21-0505 FAX 0834-21-7600  
 JR 徳山駅新幹線口下車徒歩 5 分

理事長 重枝 浩二 神栄海運(有)代表取締役社長  
 事務局長 武中 修 専務理事

事務局員数 男子 1 名 (事務局長含む)、女子 1 名

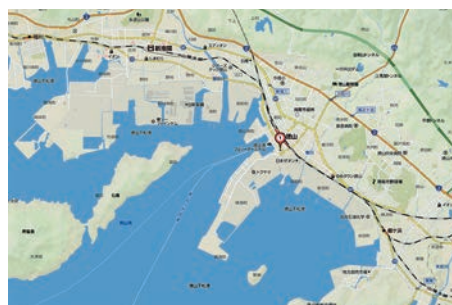
組合員数	登録運送事業者	8 社
	届出運送事業者	3 社
	登録貸渡事業者	26 社
	届出貸渡事業者	1 社
	利用運送事業者	8 社
	合計	46 社

所属船腹量

貨物船	29 隻	49,822 重量トン
油送船	13 隻	8,648 m <sup>3</sup>
台船	1 隻	954 重量トン
バージ	2 隻	10,746 重量トン
プッシャー	1 隻	347 重量トン
合計	46 隻	70,517 重量トン



重枝理事長 (左) と武中専務理事



事務局のある周南市築港町



徳山下松港湾福祉センター

## 藩政時代からの船どころ

### 【組合の組織】

山口県内航海運組合は、山口県の中でも中国地方運輸局の所轄範囲に入る防府市以東の内航海運事業者で組織される組合で岡山県、広島県、鳥取県、島根県の内航海運事業者とともに中国地方海運組合連合会 (中海連) の構成組合となっている。

山口県の中でも特に西部の旧長門国 (現下関市、萩市、長門市、美祢市、山陽小野田市と阿武郡、山口市の一部) は、本州の地域よりも九州との繋がりが深く、そうした事情もあってか、国土交通行政では、海事関係部門の管轄区域では下関市、山陽小野田市、宇部市、長門市の山口県西部を九州運輸局下関海事事務所の管轄区域に加え、山口県のそれ以外を中国運輸局管轄としている。だが、陸運部門では山口県全域が中国運輸局山口運輸支局の管轄で、海上保安の面では北部九州を所轄する第7管区海上保安本部 (福岡県北九州市門司区) が山口

県の日本海沿岸を管轄区域に含めている。また、経済団体では山口県が九州経済連合会と中国経済連合会の重複エリアとなっており、知事会では山口県が中国知事会と九州知事会に重複加入している。

山口県内航海運組合は昭和 28 年（1953）8 月、山口県機帆船協同組合が発展的改称して設立され以降、県下の内航業者の存立基礎を支える中核組織として基盤を固めて来た。

山口県下には元々、山口県内航海運組合（徳山市周辺地区）、岩国内航海運組合、防府地区海運組合、宇部地区海運組合、下関地区海運組合（のち門司地区海運組合と統合して関門地区海運組合となり、九州地方海運組合傘下に編入）の 5 組合があったが、宇部と下関は行政区域が九州運輸局になるため九州地方海運組合連合会（九海連）に所属し、山口県内航、岩国内航、防府の 3 地区組合が中海連に所属している。発足以来の最大の転換期を迎えたのは昭和 59 年（1984）6 月、運輸省（現国土交通省）が通達した「内航海運業構造改善指針」に基づく地区組合の再編統合方針だった。山口県下では中海連傘下の 3 地区組合が再編統合指導に積極的に取り組み、先陣をきって昭和 60 年（1985）11 月に最も組合員、船腹量の多い山口県内航に統合し、岩国と防府はその支部となったが、平成 19 年（2007）5 月に支部を廃止している。

山口県内航海運組合の組合員数は、運送業者が登録業者 8 社、届出業者 3 社の計 11 社、貸渡業者が登録業者 26 社、届出業者 1 社の計 27 社、利用運送業者が 8 社で、組合員合計 46 社。所属船腹量は貨物船 29 隻（22,172 総トン、49,822 重量トン）、油送船 13 隻（4,953 総トン、8,648m<sup>3</sup>）、台船 1 隻（572 総トン、954 重量トン）、バージ 2 隻（6,098 総トン、10,746 重量トン）、プッシャー 1 隻（197 総トン、347 重量トン）で合計 46 隻（33,992 総トン、70,517 重量トン・m<sup>3</sup>）となっている。

組合再編成前の昭和 61 年 4 月 1 日現在では組合員数が 201 社、所属船腹量が 201 隻（52,868 総トン）だったことからみると組合員数で 4 分の 1 以下、所属船腹量で隻数比 4 分の 1 以下、トン数比で約 3 分の 2 に減少している。

とはいえ組合活動は活発で、年 3 回の正副会長会議、理事会を開催している。また、組合活性化委員会を独自に設け、船員確保対策の一環として毎年、管内中学校生徒を招待して周辺海域の洋上体験視察や内航船の職場体験学習を実施している。平成 30 年度は 7 月と 9 月に 2 校を招待した。さらに、海難防止協調運動周防地区推進協議会との強力により荷主訪問、訪船活動も実施している。

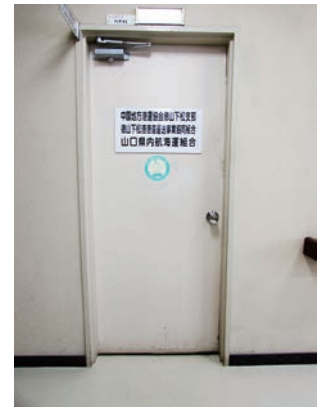
### 【山口県の産業と内航海運】

明治維新はわが国の政治、経済、社会のあらゆる分野に大きな変化をもたらし、産業構造も大きく変化するとみられたが、実際には明治時代初期に土族が従来産業へ割り込めずに、旧来の農工商階級がそのまま移行したため、山口県の産業構造は藩政時代を踏襲したといわれている。

明治初期の県内主要産業は、瀬戸内側を中心として県沿岸部全域の製塩業、錦川上・中域に広がる山岳地帯で栽培された椿、清涼で豊富な水量に支えられた製紙業、岩国・柳井（玖珂郡、熊毛郡、大島郡）や山口市付近（佐波郡、吉敷郡）の木綿業、萩焼や小畑焼、富田瓦などの窯業、宇都・山陽小野田の石炭や長登（美祢市秋吉台南東）や蔵目喜銅山（阿武郡阿東町の



事務局。手前は事務局員の磯村久美さん



事務局入口。中国地方港湾協会徳山下松支部、徳山下松港湾運送事業協同組合と事務局を兼務



北西)などの鉱産物、大島郡から厚狭郡、阿武郡にかけての製蠟などだったが、いずれも家内工業的なものが多かった。

明治時代中頃になると工業製品の割合が高まって行くが、これらの中には旧来の個人経営から発展したものもあり、士族<sup>しぞくじゆさん</sup>授産などによって近代産業への道を開いたものもあった。士族授産とは、明治政府が士族の俸禄を永続的に支給出来ないことから、生活救済のために開墾、農工業への就業奨励、起業資金の貸付などを実施した施策だった。全国的にみると士族達の失敗例が目立ったが、中には地方産業開発で一定の成果をみせている。山口県の典型的な成功例としては、厚狭郡須恵村の小野田で創業したセメント製造会社、萩士族によって創設された海運会社の覇城会社、岩国士族による染色、縫製業の義済堂などがあげられる。

このセメント会社はのちに日本を代表する小野田セメント(現太平洋セメント)となり、義済堂は藩政時代に専売品だった岩国紙などの売り捌き取扱から織物企業へと発展し、平成28年(2016)に破産するまで事業を継続している。

覇城会社は萩を所在地、下関を拠点とし、旧長州藩士の佃基清が中心となって藩内有志士族からの公債を集め、これを抵当に政府から3万円の貸与を受けて資本金とし、2隻の帆船を新造し発足している。設立後の同社は順調な経営を進め、明治17年(1884)には工部省が所有していた洋式帆船『千草丸』を借り受けて事業を拡大し、6年後には同船を300円の破格船価で払い下げされている。明治17年の『山口県第2回勧業年鑑』では同社を「肥前長崎より支那上海まで、肥前長崎より横浜まで、さらに横浜から函館まで定期航路を延長。西洋型風帆船3隻(776<sup>ト</sup>)、船長以下乗組員48名」と記しているが、明治22年(1889)以降の統計には同社が記されておらず、その企業形態や消長が不明である。だが、手広く近代的海運業を営んでいたことは間違いないようだ。

このように、山口県の近代産業は在来産業の集積から発展して来たというより、明治維新後の変化に応じて、士族を中心にした企業活動によって引き起こされて来たことに大きな特徴があるとみられる。

また、宇部の石炭を基礎とした近代産業や、佐波郡三田尻村で柏木幸助が始めた医療用体温計などのように、時代の先端を行く化学研究の成果によって新たな工業に至ったものもあった。

現在の周南市徳山地域は、臨海部に大規模工場が立地し、それに接して比較的幅の狭い带状に市街地が広がり、背後には急傾斜の山稜、山間部には農村集落が散在し、半島や島嶼部<sup>なりたか</sup>等には漁村が点在している。慶安3年(1650)、長州藩初代藩主毛利輝元の次男就隆が下松から野上村に住まいを移して「徳山」と改め、毛利3万石の城下町として栄えたと記されている。

現在の山口県周南市、下松市、光市に跨がる徳山下松港は幕藩体制下で長州藩が米、紙、塩の生産を奨励した“三白政策”により、各地域からこれら物資を運ぶために商港を整備したことが始まりだった。藩では製塩や和紙等を主要産物にし、旧山陽道の城下街道筋には商人が集まり町屋も増え、周辺地域一円の物資集散地として栄えた。また、明治維新後この地域は、元々が天然の良港だったことから新たな港湾としての役割を果たすようになった。明治38年(1905)に海軍練炭製造所(後の海軍燃料廠)が設けられ、大正時代になると日本曹



徳山下松港 (写真提供: 山口県港湾課)

達（現トクヤマ）、徳山鉄板（現日新製鋼）、日本汽船笠戸造船所（現日立製作所笠戸事業所）など多くの企業が進出。また、南部地域では昭和10年(1935)に東洋曹達工業(現東ソー)、13年(1938)に麒麟麦酒（現キリンビール）の製瓶工場が進出している。

第2次世界大戦後は、昭和23年(1948)に下松港を編入して徳山下松港となり、昭和32年(1957)に燃料廠の跡地に出光興産が進出し、38年(1963)には周南地区工業整備特別地域の指定を受け、全国で9番目の石油化学コンビナートが操業を開始するとともに、続々と製造業が進出し全国でも有数の工業都市となった。重要港湾に指定されたのは昭和26年(1951)で、40年(1965)には特定重要な港湾（現国際拠点港湾）に昇格指定され、以降、徳山地区、新南陽地区を中心に港湾整備事業が進められている。

現在の徳山下松港では徳山地区にトクヤマ南陽工場、出光昭和シェル石油徳山事業所、日本ゼオン徳山工場が立地して石油製品の配送拠点、セメントや石油化学製品を生産・出荷する石油化学コンビナートを構成している他、晴海埠頭がコンテナターミナルとして山口県内最大のコンテナ取扱量を誇っている。商船三井の東京～博多航路のRORO船『さんふらわあはかた』(6,204重量ト)の寄港地でもある。

下松地区にはブリキ、薄板製造の東洋鋼板下松工場、新幹線を始めとする鉄道車両やユニット製造の日立製作所笠戸事業所、石油製品の油槽所のJXTGエネルギー下松事業所(旧日本石油下松製油所)があり、製品は内航船で輸送されている。

光地区は、医薬品製造の武田製薬光工場、チタンや特殊ステンレス製造の日鉄ステンレス光製造所があり、原材料の搬入と製品出荷が主である。新南陽地区にはセメント製造とポリウレタン製造の東ソー南陽事業所、ステンレス製造の日新製鋼周南製鋼所があり、原材料の搬入と製品出荷が主である。

岩国地域は、幕藩時代に周防の国大島郡の鳴門村、神代村と玖珂郡南部で、岩国藩主吉川家の領地だった。吉川家は毛利元就の次男吉川元春を祖とし、その孫広家が毛利輝元より長州藩の東の守りとして3万石を得て初代藩主となった。2代藩主広正は製紙業を起して成功させ、寛永17年(1640)にこれを専売化し財政の健全化を図り、3代藩主広嘉は文化事業に尽力し延宝元年(1673)に錦帯橋を完成させている。4代藩主広紀は干拓事業を拡大して藩経営が全盛期を迎えた。その後、凶作や製紙生産高の半減などから藩財政の悪化を招くが、寛政年間(1789～1801)より財政改革に着手し、天保年間(1820～1844)には10代藩主経礼が干拓事業によって藩財政再建を成功させている。

岩国港は、初代藩主広家が錦川下流域の今津川河口部の干拓に着手し、物置場を築造したのが起源。10代藩主経礼が文化8年(1811)に麻里布湊を建設し、ここがのちの岩国港となった。明治初頭には海外移民の乗組基地としての役割を果たし、中国への定期船、不定期船の拠点となった。商港としての発展は、大正時代に入ってからで、その背景には四季を通じて温暖な気候、良質で豊富な水資源があることに加え、藩政時代から営々と続けられた錦川や小細川河口の干拓事業により、広大な平地が開かれたことにもある。近代工業では大正14年(1925)に帝国人造絹統制(現帝人)が進出。日産7.7トの生産能力を誇る国内初の大規模人造繊維工場の立地は、当時の注目を浴びた。次いで、昭和11年(1936)に東洋紡績、翌12年(1937)に山陽パルプ(現日本製紙)が進出。さらに、昭和16年(1941)には陸軍燃料基地として、国策会社の興亜石油(現JXTGエネルギー)と相次ぎ、岩国港周辺は近代的な臨海工業地帯として変貌し活況を呈し、海運業も盛んになった。



岩国港 (写真提供：観光庁)



岩国地区は国策会社を始め軍需工場地帯として発展したため、第2次世界大戦では壊滅的な被害に遭っている。戦後は各企業とも、いち早く復興に取り組んだが、国策会社が立地していたため、GHQ（連合軍総司令部）の統制下にあったことから、復興に遅れをみせていた。だが、昭和24年（1949）、興亜石油の再開発許可を契機に、三井石油化学の創立の動きが急加速し、興亜石油も同社へ資本参加し、三井石油化学大竹工場の建設に協力して原料ナフサの供給源となり、全国でも先駆けて岩国、和木、大竹の3市町に跨る石油化学コンビナートが誕生し、飛躍的に発展した。

戦後復興と同時に海運業も栄えた。当時は鉄道、道路とも戦禍の影響が大きく、大量輸送は船に依存せざるを得ない状況下で、海運業が最も隆盛した時代だった。岩国地区に立地する工場群からはドラム缶入りの石油製品、LPG、紙製品が全国各地に機帆船で輸送され、またエネルギー源の石炭や製紙原料の木材が九州・四国各地から出入港するなど荷動きは活発。また、5トンの前後の発動機船が岩国市東南の桂島と近隣の島嶼部間で、農産物や海産物を満載して往来し、雑貨輸送も多かった。同地区の海運業は地元貨物を中心のローカルオペレーター色が強く、小型船が主力となっているのが特徴。

第2次世界大戦後は、昭和27年（1952）に重要港湾に指定されている。岩国港の背後地に製紙パルプ工場があって、パルプ用原木輸送が搬入されている。また、石油化学コンビナートから出荷されるプロパンガス、ドラム缶入り石油製品、柱島と岩国間の農産物、雑貨の輸送なども多い。



三田尻中関港（写真提供：観光庁）

もうひとつの船どころ防府市は、山口県中南部の周防灘に面し、旧佐波郡と旧吉敷郡の一部。県内最大の防府平野と佐波川の河口に位置している。防府市にある三田尻中関港は、関ヶ原の戦い以降、毛利氏の御船手組である毛利水軍が防府を拠点とするに当り、ここを軍港、商港として整備したことに始まる。参勤交代の経路として長州藩の海の玄関口となったとともに、長州藩の前述“三白政策”の取引に活用されている。特に三田尻は防長2カ国の製塩の半分を占める製塩業者201軒、塩生産36万石で、赤穂に次ぐ日本国内第2位の生産量を誇っていた。これが廻船業の発展と北前航路の開発で大坂方面だけでなく山陰、北陸、東北地方にまで出荷され、藩財政と地元経済を発展させ、復荷に生活必需物資が持ち込まれ、地元の活性化が図られた。これによって地元での海運業が盛んになって、有力な船どころが形成されたのだった。

昭和初期から三田尻地区へは工場誘致が活発で、昭和8年（1933）には福島人絹（現東洋紡）、9年（1934）に鐘淵紡績（のち消滅）が進出。戦前戦後は機帆船を中心に地元の塩、人絹などの織物を各地に輸送、復荷に九州などから石炭を運んだ。昭和34年（1959）に重要港湾に指定され、39年（1964）には周南工業整備特別地域の指定を受けている。昭和57年（1982）からはマツダが主力工場のひとつを操業開始し以降、中関地区は自動車輸出港として発展している。また、三田尻地区はトヨタ自動車の車両輸送基地としても活用されている。

【参考文献】 漁剛司著『山口県における近代産業の興りと産業技術資料』、島中茂朗著『近代移行期における土族授産企業の設立と展開』、山口銀行下関支店『山口県金融風土記』



遠石八幡宮（左）と航海安全の御守護札

## 古代天皇と宗像3女神を祀る2社

### 【文化と伝承】

周南地域の海の御守護神といえは遠石八幡宮と山崎八幡宮である。

社伝によれば建立は、推古天皇30年(622)に宇佐八幡大神の「この地に跡を垂れ国民を守らんとここに顕わる」とのお告げがあり、御神霊をここに奉安したのが起源とされる。和銅元年(708)に社殿が造営されて大社となり、平安時代から石清水八幡宮(京都府八幡市)の別宮となり、本朝四所八幡のひとつとも称された。江戸時代には毛利徳山歴代藩主の崇敬篤く、祭礼には諸国からも多くの参詣を集めた。海上交通の要地にあり、航海安全が祈願されている。江戸時代に入ると、長州藩支藩の徳山藩(下松藩を移設)の歴代藩主は、ここを氏神とした。その後も周防国の大社として信仰は広がり、明治時代の社格では県社となった。

遠石八幡宮は平成25年(2013)12月、本殿、幣殿、拝殿、祭器庫、神饌所、透塀、神門及び袖塀、手水舎の8件が登録有形文化財に登録された。また、洪鐘は周南市文化財である。銘文には、源平の戦で流れ矢が鐘に当たって音が悪くなったため、正和5年(1316)に新たに一鐘鑄造したが、音色が思わしくないため、元応2年(1320)2口合わせて一鐘を鑄造し直したとある。鎌倉時代前期の特徴を表した美しい鐘である。神社の西方の飛び地にあり御影石は往古、宇佐八幡より神馬が飛来して磯辺に現れた大石に降り立たった際のお告げに「ああ遠し」とあったとされ、影向石として地元の人に崇拜されており、沖に大石があったからという説や、十名石があったからという説もある。

祭神は、応神天皇(誉田別尊)、神功皇后(息長帯比賣命)と、田心姫命、多伎津姫命、市杵嶋姫命の天照大神と建速須佐之男命の誓約により生まれたとされる宗像大社三女神。応神天皇は父の仲哀天皇ご崩御の後、生まれながらにして第15代天皇となり、その腕が弓を射るときにつける鞆のように逞しいことから、誉田別尊と称された。大陸の文化と技術を取り入れ新しい国造りを進め、武徳の靈験はもとより文教の祖神、興業の守護神として崇められる八幡大神の主神である。神功皇后は、応神天皇の母君としてご内助の功多く、懐胎の身にありながら戦を征するなど、安産を始め母子の守護神としても崇められている。三女神は道主貴とも呼ばれ、「道」の守護神として航海安全や武芸の道に靈験ありとされている。



山崎八幡宮(左)と航海安全の御守護札

山崎八幡宮は周南市宮の前にあり、奈良時代の和銅2年(709)、富田河内にある神室山に神が降臨され、これを奉斎したことが起原とされる。主祭神は応神天皇、配祀神は田心姫命、湍津姫命、市杵嶋姫命の宗像三女神と神功皇后。一説には、豊前国宇佐八幡宮の分霊を祀ったともいわれ、この後、山崎の地に遷し、江宮と称した。平安時代の神仏習合時代には、真言宗の莊宮寺と習合し、「庄寺八幡宮」と呼ばれた。元治元年(1864)に山崎八幡宮と改めた。その間平安時代に2度の火災に遭い、現在の社殿は明治9年(1876)に再建されたもの。明治4年(1871)に郷社、昭和5年(1930)県社に昇格した。

室町時代の天文8年(1539)、領主の陶弘護や隆房(晴賢)は、神前に扁額を寄進し戦勝を祈願している。江戸時代には、徳山藩主の御祈願所として、歴代の藩主が社参して崇敬した。

『防長寺社由来』には、富田一二畑の惣鎮守の社で、西国7社明神と言い伝えられ、秋祭には「神事能楽」が奉納された記録がある。その後、神事能は止み、代りに藩主が大小3つの山車(引山)を奉納するようになった。この山車による神事は、今も「本山神事」として続けられており、平成22年(2010)5月、山口県の指定無形民俗文化財に指定された。